

**札幌新まちづくり計画市民会議  
環境・都市機能分科会第2回会議概要録**

**日 時** 平成15年12月22日(月) 15:00～17:30

**場 所** 市役所本庁舎 5階 会議室

**出席者** 小林英嗣 会長  
大坂 紫 委員 ・ 太田幸雄 委員 ・ 中井和子 委員 ・ 中島 洋 委員  
林 雅之 委員

**次 第**

- 1 開 会
- 2 議 事
  - (1) 前回のまとめ
  - (2) 事務局説明(配布資料)
  - (3) 意見交換(施策の基本方針など)
  - (4) 全体会議への報告内容の確認
  - (5) その他
- 3 閉 会

**議事の概要**

最初に、前回の討論について確認がなされた(資料1)。

続いて事務局から以下の事柄について資料に基づいた説明と質疑応答がなされた。

- ・ 施策の基本方針(資料2)
- ・ 公共交通を軸とした交通体系の確立について(札幌市総合交通対策調査審議会答申)  
(資料3)

その後、各委員からの提言等に基づき、具体的な施策などについて活発な意見交換がなされた。

最後に、全体会議への報告内容の確認の後、閉会となった。

## 意見交換の概要

### 配布資料に関する質疑応答（Q/A）〔・は意見〕

- Q 資料2は現在の札幌市の第4次長期総合計画を背景として、これからの3か年で重点的にどのような施策を展開していくかを市の内部で検討、整理したものが。（小林会長）
- A はい。（事務局）
- Q 資料3の内容の骨子は長期総合計画に組み込まれていると理解していいか。（小林会長）
- A 交通の面ではそうだ。（事務局）
- Q 資料2は市のプロジェクトチームが今回の会議に合わせて考えたものではなく、以前から考えていたものか。（中島委員）
- A 今回プロジェクトをつくり検討したもののだが、方向は長期総合計画に沿っている。（事務局）
- ・ 長期総合計画が縦系だとすると、横系となる3年間の重点施策をここで議論すればよいと認識してる。（小林会長）

### 意見交換（・）と質疑応答（Q/A）

- ・ 市民からは除雪対策、冬期の交通対策に関する要望が非常に多い。それをもう少し積極的にやれないか。家の前の除雪を安価にやってくれる民間業者が出てきているのでその事業展開を援助するというのを考えればいいのではないか。（太田委員）
- ・ 融雪槽、融雪器の普及は地球温暖化対策的にいいことかという問題がある。融雪器、融雪槽をつくって雪を処理する場合と、トラック等で運んだ場合の費用、エネルギーの比較を札幌市で行ってほしい。結果は明らかだと思うが。（太田委員）
- ・ ツルツル路面对策として、ごみ収集車やパトカー、除雪車などの公共車はスパイクタイヤを履けばいいのではないか。また、ツルツル路面を砕く砕氷車、砕氷機を試作できないだろうか。（太田委員）
- ・ 中心部への自家用車の乗り入れを禁止し、無料あるいは低料金の循環バスを走らせたらいいのではないか。（太田委員）
- ・ 前回会議で出た札幌駅～大通間に新設される地下街を開放感のある空間にするということには大賛成。大通への客の誘致になるのではないか。（太田委員）
- ・ サスティナブルシティ、コンパクトシティとしての札幌はどんどん推進すべき。そのためにCO2排出削減、除雪のエネルギー削減、渋滞のない交通システムへの転換、コジェネレーションシステムの推進をしていく。（太田委員）
- ・ 街路樹の落ち葉やプラスチック系ごみなどは燃やしてエネルギーを回収することを考えたらいいいのではないか。（太田委員）
- ・ 少子高齢化が進むと都心居住が進み、特に郊外でたくさんの空家が出るのではないか。（太田委員）
- ・ 住み替えについては今は民間にすべて任せているが、持続活用をサポートするようなものが必要ではないか。（小林会長）
- ・ 都心回帰の兆候は現実に出ている。そのときに高齢者がゆっくり歩いて楽しめる構造がまちなかに必要になる。（中島委員）

- ・ それにはマンションだけではなく、マンションと地域が一体となって高齢者を受け入れられるような再生をしていくことが必要。ただ、都心と郊外で極端な年齢的な偏りが出るのも問題なので、混在できるような施設づくり、まちづくりが一般的。（中井委員）
  - ・ まちの古い建物の再活用としては、中古マンションの改装というのが若いデザイナーたちの間でブームになりつつある。（中島委員）
- Q 今札幌市では中規模のオフィスビルが余りはじめている。それを住居兼用にコンバージョンするという建設省の方針があるが、札幌市では何か独自にやっているのか。（小林会長）
- A やっていない。（事務局）
- ・ オフィスとしてつくったものは住宅として使われると建築基準法に合わないということがあるので、コンバージョンの進め方は非常に大きな問題。建築基準法に合わせるようにするか、独自の基準をつくっていくという方向がある。（小林会長）
- ・ 地域通貨はいい材料になる。広報さっぽろ等でマンション型のコミュニティ的なつながりが少ないところに提案するという事も考えられる。（中島委員）
  - ・ 都市計画というのはハードづくりだと思っていたが、この会議では何のためにするのかというソフト面を議論するのだということが分かった。（中島委員）
  - ・ 例えば都心部の外観だけでも50年くらいは変えないというくらいの覚悟でやるというのはどうか。（中島委員）
  - ・ 地域には溜まり場をたくさんつくりたい。その意味で連絡所の活用は非常に重要だろう。多くのボランティア、NPO的な組織がかかわり用事がなくても出入りできるような場所というイメージを持っている。（中島委員）
  - ・ 大通公園を完全なグリーンベルトにしたい。地下通路をつくる際に駅前通のみどりを大通公園に移植できないか。（中島委員）
  - ・ 長期的にはLRTの導入によって歩けるまちにしたい。（中島委員）
  - ・ 前回出た大通小学校の跡地利用については、例えば校庭への植樹などに積極的に活用したい。（中島委員）
  - ・ これからは、規制をするのか市民の自発性にゆだねるのかというのが大きなポイントになるが、市民の自発的な意識は規制をつくってしまうと駄目になる。（中島委員）
  - ・ 私の重点としては、長期的なビジョンを理想論で語りたいということ。それと、市民がシンボルと思える具体的なものをつくりたいということ。（中島委員）
  - ・ 溜まり場ということでは、例えば地下通路にカフェができたらいいと思う。その前段階としてベンチをたくさん置き、パブリックアートのような形で提起するというのも面白いのではないか。（大坂委員）
- Q 大通小学校の跡地利用については「札幌の劇場を考える会」が「中心部芸術文化アトリ工構想検討」を提案し「札幌演劇人連合」が演劇創造の場として活用したいというように、地域から多くの要望が出ていると聞いている。どういう動きになっているのか現状を教えてほしい。（大坂委員）
- A 廃校になるのは、大通小、曙小、豊水小の3つ。先日、豊水小の地元説明会を行った。また、いろいろなところから要望をいただいている。行政需要もあり、そういったものをにらみながら跡地利用を考えていきたい。（事務局）
- Q 都心部にマンションが建ち始めていたり、都心居住ということが言われているが、小学校がまた必要になるということはないか。（中井委員）

- A 人口も増えているが、子供の数は増えていない。ある程度高齢の方が都心に住まれるようになってきているので、何十年先くらいまでは増えないということだ。（事務局）
- Q 地下通路に対する要望も上がっていると聞いている。その要望や具体的な活用のアイデアもあれば教えてほしい。（大坂委員）
- A オープンカフェとしての利用という指向をされる方は多い。単純な通路で終わってほしくないという意見が大半だと思う。駅前通路についての市側の案は、単純な通路ではなくて沿道のビルの再開発などと合わせて空間を確保するというもの。道路としての空間だけではなく、公園的な要素の空間も抱きあわせて、中間の形態の空間もつくり、活用できるようにしていきたい。日本では道路は道路以外には使えないのだが、そこをクリアするために工夫している。もう少し深く煮詰めなければいけないが。（事務局）
- ・ 幅12メートルの通路の両側に4メートルのスペースという構造。4メートルのスペースはいろいろなことができる場所にしようということだ。そこを市民のボランティアを含めて、いい環境に整えるというのが課題としてある。（小林会長）
- Q 既存の地下通路は道路ということになってしまうのか。（大坂委員）
- A 既存の地下通路は道路部分は道路としてしかやりようがなく、それを広げられるような構造になっていない。規制緩和で道路の使い方を変えようという議論が進めば可能性はあると思う。（事務局）
- Q その議論はどこで進めばいいのか。（大坂委員）
- A 道路管理者の合意がとれるかということになる。道路管理者には、道路管理と交通面の管理者があるが、それは道警や国や市。ただ、規制緩和の壁は非常に厚い。それは1か所の規制緩和は全国的な規制緩和につながるからだ。（事務局）
- ・ 福岡の川端商店街では、つぶれた店を市が買い上げて川端ぜんざいというのを始め、溜まり場になっているという例がある。これは人通り、休み処を積極的に公費で担保しているということだ。（小林会長）
  - ・ 両サイドの建物の地下部分がガラス面が多いような店舗になればいい。そうすればにぎやかな空間になっていくはず。（中井委員）
  - ・ ただ、沿道にはオフィスビルが多く、そういった発想を持っていただけかということがある。（事務局）
- Q 地下通路の通路部分の管理をTMOが引き受けるということはあるか。（小林会長）
- A あり得ると思う。（事務局）
- Q 屋台やワゴンが出るような場合はTMOがコントロールするということは可能か。（小林会長）
- A 特に、商業的な行為をそこに独占的にやらせることに対してはいろいろなところから意見が出ると思う。（事務局）
- ・ すぐはできないが、頑張ればできる状況は見えつつある。（小林会長）
  - ・ 連絡所をまちづくりセンターにという話がある。そこに市のOBがいて町内会と付き合いとなるとあまり変わらないと思うので、OBを活用するのであれば、市民活動やNPOについての知識を研修などでつけてもらう。NPO活動をしている方がそこに外向き対応するという形も考えられる。北海道立市民活動促進センターの相談窓口は、実際に活動しているNPO団体の方たちである。（大坂委員）
  - ・ 文科省で学校体育館の地域開放の話が進んでいる。空き教室開放も市長と教育長がやろうと言えばできる。（小林会長）

- ・ N P Oをつくれれば町内会でもまちづくりセンターを運営できるという基準をつくる。町内会には町内会の問題点もあるが、今まで地域のコミュニティをつくってきたし、地域の方が率先して行動するということが重要だ。（中島委員）
- ・ 教育施設も公共的な施設と考えて時間でシェアしてみんなで使えば余計な建物をつくらなくていい。（小林会長）
- ・ 雪まつりやY O S A K O Iといった、札幌を象徴するような大きなイベントでボランティアがごみ箱にごみを捨てに来る人に分別を呼びかける「ごみゼロナビゲーション活動」をする。自分で分別をしてもらうことで、リサイクルの重要性や環境問題に対するきっかけになるし、札幌市の大きなキャンペーンにできる。（大坂委員）
- ・ 東京には札幌には「A S E E D J A P A N」、札幌には「エゾロック」という「ごみゼロナビゲーション活動」を行っている団体がある。（大坂委員）
- ・ 前回も言ったが、仙台市は「ワケルくん」というごみ分別キャラクターを使って、グッズをつくったり、リース企業などと共同キャンペーンをやっている。札幌市も真似してはどうか。（大坂委員）
- ・ A S E E D J A P A Nの活動は、イベントの主催者は清掃係を雇わず、A S E E D J A P A Nに依頼し、学生にはおしゃれなTシャツを着させたり、時間があればタダで見ていると言ってボランティアを募っている。そのような、手に入らないものが得られるとか、名誉になるという仕掛けがないと人は来ない。また、人を動かすには危険も伴うため、保険もかけている。（中井委員）
- ・ 大通公園のイベントは音楽イベントのよりもきつくもないし、イベントのボランティアが集まらないということも聞かないので、工夫のしようでできると思う。（大坂委員）
- ・ 札幌市では今年、食器洗い機を載せた自動車を1台つくったらしいが、そういうものをまちなかのイベントにもってきて、使い捨て食器を使わないお店に出店してもらい、ごみ削減を訴えるということも考えられる。（大坂委員）
- ・ このような取り組みでコミュニケーションが生まれ、札幌市民だけではなく観光客も楽しい気分になるということもあるのではないか。（大坂委員）
- ・ まちづくり活動の周知にコミュニティFMを活用したらいいのではないか。コミュニティFMに関わっている多くのボランティアも知ることができるし、地域限定なので効果が高いのではないか。（大坂委員）
- ・ 札幌市の広報テレビ番組をその時間に見られる人、狙って見る人は少ないと思う。それをビデオにして市の施設などで貸し出すとか、市役所ロビーで再放送する、市のイベントの待ち時間に流すという「広報テレビ番組のリユース」をすると多くの人に知ってもらえるのではないか。（大坂委員）
- ・ イベント会場を公共施設に予約しに行ったときに、そこでコミュニティFMでイベント紹介してもらうことが簡単にできるような連携体制があればいいのではないか。（大坂委員）
- ・ ポートランドではより広く広報し市民参加やコンセンサスを得るために、民間の広報メディアにいた人を入れてこれまでと違う作戦をとり始めた。札幌市ももっと戦略的にいろんな媒体を使ってやらないといけない。（小林会長）
- ・ 情報については、単純な観点から民間の知恵を使った方がいい。例えばICC（札幌市デジタル創造プラザ）には若い良いスタッフがいる。また、単純に市のCMを公募してしまえばいい。それは若いスタッフにチャンスを与えることにもなる。（中島委員）

- ・ 公園などの管理運営にもっと市民が関わると面白いまちづくりができると思う。モエレ沼公園のイベント「ホワイトクリスマス」にいろんな市民団体が関わっているという例もある。(大坂委員)
  - ・ 区民センターの図書室など、公共施設の閉館時間をボランティアを活用するなどして伸ばしてほしい。そういうところで行動を起こす人が増えることがまちづくりに役立つのではないかと思う。(大坂委員)
  - ・ この間、六本木ヒルズに24時間オープンな図書館ができたが、そこでは月に1回くらい座談会やシンポジウムをする。情報格差をなくしていきたいということで、希望があれば地方に配信するそうだ。何でも東京という状況ではなくなりつつある。(小林会長)
  - ・ 地下鉄駅やJR駅でレンタサイクルをやったらいいのではないか。そうすれば公共交通の利用も増えるのではないか。(大坂委員)
  - ・ あるアメリカ人は、なぜ日本の地下鉄には自転車に乗せないんだと言っていた。(小林会長)
- Q 自転車ロードを札幌市で計画できないか。特に夏は利便性は高まる。(太田委員)
- A 自転車優先道の整備ができるかどうかは分からない。ただ、今の道路空間に自転車利用をどのように盛り込むかというのは課題だと考えている。  
 レンタサイクルの課題としては、パークアンドライドもそうだが、バス利用減の方向に作用するということがある。  
 自転車は危険物になってしまうので地下鉄車内への持ち込みはご遠慮いただいているが、今後の課題としてはあると思う。ただ、外国の例を見ると、混んでいても乗ってくるのが許容されていたり、特に自転車のための施設はなく自己責任で担いでくるということがあつた。そういう状況に市民が慣れるという意識の醸成も必要だという気がする。(事務局)
- ・ ビジョンの方針としては歩行と自転車を打ち出す提言をしていかなければならない。(中島委員)
  - ・ 一気に変わるのは難しい。重要なのは徐々に変わるための試行で、課題が見つければ改善していくというステップを踏むことが大事。(林委員)
  - ・ 札幌の中心部には自転車を停める場所がない。自転車を勧めるならば、自転車に乗りやすくすることを考えてほしい。(太田委員)
  - ・ 狸小路にも駐輪場があるが有効活用されていない。そこだけにあつてもだめで、バスなども含めて総合的に自転車も乗り入れられる交通を考えなければいけない。(中島委員)
  - ・ 3年くらい前にアメリカで交通平等法ができた。その、人も車も自転車も車椅子も全部まちを使う平等な権利を持つという考えに立ち、今、まちの中の修正をいろんなところでやり始めている。(小林会長)
  - ・ コンパクトシティという論点についてはもう少し慌ててもいいのではないか。それは私たち都市生活者が環境に大きな負荷をかけており、それを低減しなければならないということがあるからだ。(林委員)
  - ・ コンパクトシティに関連してこの3年間でできるのは、札幌市としての目標像を掲げそれを踏まえてどういうステップで実現していくのかという行動計画をつくること。(林委員)
  - ・ LRT導入については「LRTさっぽろ」という団体はかなり具体的な提言をしている。そういうものを積極的に活用していけばいいと思う。(林委員)

- ・ 市電は車椅子で乗れるように変えていかなければならない。(中島委員)
  - ・ 今の札幌市の枠組みではそれは絶対にできない。JRへの移管というレベルの話も進めながら議論した方がいいと思う。(小林会長)
  - ・ 市街地がコンパクト化されると都市縁辺部の整備、保全が新しい課題として持ち上がってくるだろう。その管理も検討課題の一つ。(林委員)
  - ・ コンパクトシティのモデルケース的なものは、日本にはまだないが、カナダでは、連邦政府と州、バンクーバー、バンクーバーの民間の協議会によるプロジェクトがある。30年、40年くらいの計画だ。それはまちを小さくすることではなく、緑を増やしたり、古くなった市街地を別な形にしたりということ。サステイナブルなまちにしていくという部分では先端ではないか。(小林会長)
  - ・ フランスのストラスブールでは市長がLRTを公約に当選し、3、4年という短期間で完成させたそうだ。(林委員)
  - ・ そのための負担は市民がしなければならない。(小林会長)
  - ・ 札幌駅前については、地上が再生するイメージがあって地下通路ができるということでないとは絶対にいけない。(中島委員)
  - ・ ある地域は、LRTが来たらまちは変わるという考えから、自分たちのまちをLRTが入るといいなと思うような質の高い魅力的なものにしていこうという考えに変わった。(小林会長)
- 
- ・ 居住環境というのは札幌市都心部だけに限らずとても大事な視点。それを3つの大きな基本的視点から考えてみた。(中井委員提出メモ「参考資料-1」参照)(中井委員)
  - ・ 都市計画に関する研究者、磯村英一氏は「人間にとって都市とは何か」ということを「都市は人間の集積(Accumulation)である。」、「都市は人間が定着(Settle)する空間である。」等の10項目で表している。(中井委員)
  - ・ これらは都市を考えるとときのベースとなる考え方。それを札幌市の都市計画、札幌市の個性、現代という時間の中で具体的にどう位置付けるかをわれわれは考えていくということだ。(中井委員)
  - ・ 資料2には「美しいまちなみ、景観」という言葉はどこにもない。結果としてはそうなるかもしれないが。(中井委員)
- 
- ・ すべての分科会のテーマにまたがるフィルムコミッションの積極的な活用をぜひ打ち出しておきたい。乱立したフィルムコミッションが淘汰されつつあるが、今はむしろ札幌を売り出すチャンスだと思う。(中島委員)
- 
- ・ 古いものの活用、まちのコンバージョンというのは、世界的な常識として当り前のことだが、それには規制緩和や助成などいろんなことが必要だということを確認しておきたい。(小林会長)